

☆介護する人に支えを 17日に講演会

朝日新聞デジタル 広島 2018年2月16日

<https://digital.asahi.com/articles/ASL2B55KJL2BPITB00B.html>

> 高齢者や障害者ら身近な人を介護（ケア）する人「ケアラー」をめぐる問題を考える講演会が17日、広島で開かれる。一般社団法人「日本ケアラー連盟」（事務局・東京）と「広島重い障害をもつ人の生活を考える会」が共催する。

「ケアラーが『助けて』と言える社会をめざして」と題して、同連盟代表理事の堀越栄子・日本女子大教授が講演する。

高齢者や障害者を介護する人が社会から孤立し追い詰められるケースなどが社会問題化する中、同連盟は2010年に設立された。ケアラーを「家族などの無償の介護者」と定義し、介護される側とする側の双方が尊重され、無理なく介護を続けられる環境の整備などをめざしている。

17日午後2～4時、広島市中区加古町のJMSアステールプラザ4階（中区民文化センター会議室AB）。参加費500円。定員110人。申し込み不要。問い合わせは事務局（h.life.kensyu@gmail.com）へ。

背中を押した 主治医の提案

呉市在住で、この講演会の運営に携わる日本ケアラー連盟代表理事の一人、児玉真美さん（61）は、重度障害者の親の立場として「ケアをする人のケア」の重要性を訴える。「ケアラーがつらいと感じるほど外に助けを求めることは難しくなる。頑張らないと、と自分を追い詰めていく」

1987年の出産時にけいれんを起こして意識不明に。長女の海さんは重症の仮死状態で生まれた。生活は一変。仕事を辞め、全介助が必要な海さんにつきっきりになった。「ケアラーの多くは、あらかじめの準備もなくある日突然、思いもよらない事態が起きて巻き込まれていく」

病院でも、役所でも頭を下げてばかり。「お母さんが頑張らないと」。そんな激励が伝わらなかった。これ以上無理だと思ったとき、「なんてひどい親なんだ」と自分を責め、更に頑張るしかなくなった。

療育施設から養護学校に通わせるのはどうか。海さんが小学校に上がるころ、主治医からそんな提案を受けた。抵抗があったが「何もかも一人ではできない。僕たちに手伝わせて」と背中を押された。様々な社会的サービスの利用を促したり、手を差し伸べてくれたりする人の存在は大きいと感じた。「あのままでは、娘か私のどちらか、または両方が死んでいた」

30歳になった海さんは平日は療育施設で過ごし、週末家に帰宅するという生活。児玉さんは、フリーライターとして問題を提起したり、支援のあり方について研究をしたりしている。

「広島ではまだ『支援』というと、介護を必要とする人への支援までしかイメージされていないように感じる。ケアラー自身はもちろん、専門職や行政の方々にも、ケアラーへの支援という視点に気づいてもらいたい」

…などと伝えています。

△日本ケアラー連盟

<http://carersjapan.com/>

